

## I 巻頭言

### 荏本孝久先生と熱意ある会員の歩みへ敬意を表して

塾長 鷲山龍太郎



15年間塾長を務めていただいた荏本先生が塾長を退任されるとともに、名誉塾長にご就任いただけたことは、本会としては大きな喜びです。今後とも私達の指導者、助言者、そして共に活動していただける仲間として、本会の理念を代表して、末永く私達を見守っていただけることを願います。

ホームページにも公開されている、「だるま 10 周年記念誌」には、荏本先生が、1995 年 1 月 17 日、大阪に滞在中に阪神淡路大震災を体験され、悲惨な現地の様子を目の当たりにされ、ハードによる防災に限界を感じられたことが書かれています。そこから、「ハード、ソフト両面からの防災」という想いが「防災塾・だるま」創立の理念の原点であることがわかります。

阪神淡路大震災の 10 年後、2005 年に神奈川大学で開催された生涯学習講座「地域防災まちづくり講座」に集まった防災に関心がある方々と交わされた意見や課題を実践活動に移すことを目的に、2006 年「防災塾・だるま」が発足することになりました。

以来、本会が取り組んできた活動の実績はホームページに丹念に整理され、膨大な防災についての情報の宝庫となっています。まさに、「防災塾・だるま」の資産です。

また、何よりの資産は「防災塾・だるま」を中心として築かれた人的ネットワークです。それを実現してきたのは、荏本先生の学識に学び、理念とお人柄に共感して主体的に活動を展開してきた熱意ある会員の存在です。

荏本孝久先生と熱意ある会員の、15 年に及ぶ「防災塾・だるま」活動と人的ネットワークの創出には、心より敬意を表したいと思います。

荏本先生が近年のご講演で説かれるように、社会の質も、災害、防災対策の質も変化してきた今、時代に対応した本会の進路を模索しなければなりません。

今回 15 年に及ぶ、荏本塾長と歩んできた本会の歩みをふりかえり、先生の理念と多大なるご尽力、それに共感し、力を合わせて努力してきた会員皆様の取組みを本誌において有形のものとして残したいと思います。それを基盤として、様々な災害が切迫するこれからの時代に向き合う本会会員が歩むべき道を示す一助になる光を当ててい行くことができるように願います。



## 「防災塾・だるま」の思い出

名誉塾長 荻本孝久

2005年（平成17）に設立された「防災塾・だるま」は、15年間を皆さんと一緒に歩み続けて来ました。その間の活動については本誌の中に記録されています。15年間とは言え最後の3年間くらいは、従来から続けてきた活動の課題が積み重なってきて、会員の方々への意思疎通や活動方針の一元化など「防災塾・だるま」としてのまとまりに苦慮して、如何に新しい「防災塾・だるま」の体制に変えていくかということに思いを巡らせて来ました。そして、令和3年5月の総会で新しい体制が誕生して、ホットしているところです。



さて、この15年間に及ぶ活動でまず思い出するのは、何故「防災塾・だるま」のような活動を始めたいと思ったか、その切っ掛けが原点になります。

今回塾長を退任するに当たって、新塾長の鷲山さんから「だるま通信」を定期的に発行するので、「名誉塾長の部屋」というページを創り、私が防災研究や地域防災の活動に進んできた思いを書き綴って欲しいとのお話を頂き、随時原稿を書き連載して頂いておりますが、そこに書こうと思っていることを雑然と考えながら、幾つかのポイントとして先に書いてみたいと思います。

まず、「防災塾・だるま」の活動を始めたいと思ったことは、1つは「防災は行政だけの問題ではなく、市民一人ひとりに関係する問題で、その結果は災害が起こってみると明確に分る。」と諸先生・先輩に言われていたことと、1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災の被災現場を訪れて、「被害を受けた住民の方々は、自分達がどのようなリスクのある場所で生活していたのかという認識を殆ど持っていなかった。」ということがはっきりと理解できたことで、土木・建築の分野で研究を進めるには防災の知識、とくに地域の災害リスクの特徴について、地域の住民と一緒に理解し、その理解を防災情報として共有していかなければ、本当の防災にはならないと思ったからでした。

15年間の中で地震や洪水、火山噴火など多くの災害が発生し、防災に関わる意識が変化してきています。今の経済社会の環境の中で、災害を受けると生活も人生も一変してしまうという危機感が強まってきたこともありますし、現在の新型コロナウイルス感染症の拡大により、自分の命が危機に至ると言う切実な状況も大きく影響しているのではないかと考えます。



いずれにしても、防災に関する意識が高まってきたのは事実だと思います。しかし、反面防災の情報が多くの機関・組織・団体から発信され、こと細かい情報が世の中に氾濫している状況は、決して好ましい姿ではないようにも思っています。

防災そのものは、生活する上で極めて基本的かつシンプルなものであると思っている自分にとっては、現状が、かえってその考えを惑わすものとしか思えなくて、困惑しています。やはり、情報を自分で取捨選択する力が重要なのでしょう。

もう一つ述べておきたいことは、実践が極めて大切だということです。思い出の中には「実践的防災まちづくりコーディネーター養成講座」という講座を「防災塾・だるま」のメンバーの方々と協働して10年以上継続して開催してきた事実があります。また特に大きな経験としては、実際の被災地を訪れて、地元の被災体験のある住民の方々と交流を持ったという体験は、何物にも変え難い防災意識の高揚に寄与したものであると思っています。そういう意味で毎年のように1月17日には神戸の「震災の集い」に参加してお話を聞いたり、神戸の町を歩いたり、また「新潟県中越地震」で被災した長岡市を訪問してお話を伺ったり、2011年東日本大震災で被災した三陸沿岸の地域を訪問して、交流を深めたことは、大変有意義であったと思っています。もちろん毎月開催してきた「防災まちづくり談義の会」で外部から多くの防災に関わる研究者の方々や地域で防災活動を続けて居られる方々に話題提供して頂いて、討論を積み重ねてきた実績も大きな宝となっています。



こういった多くの活動が、設立当時から大変に珍しい新しい取り組みであったということで、社会でも注目されて大きな活動になってきたのではないかと考えています。私は、自分の講演会で話題提供をさせていただく際には、必ずと言って良いほど、「行政サイド」の防災対策と「住民サイド」の防災対策には大きなギャップがあり、我国のように国土が狭く災害が多発する環境では、「行政」、「地域」と「住民」が連携して防災対策を進めていくことが大変に重要で、まだまだその構図は完成していないと考えているとお話をしてきました。

以上書きましたように、いろいろな思い出がありますが、「防災塾・だるま」の理念としてきた「防災・減災情報の共有化と人的ネットワークの構築」という考え方はこれからも大切にしていきたいと思っています。

皆様には、これまで共通した思いをもって一緒に活動を担って頂き、本当に有難うございました。心から御礼申し上げます。これから続く「防災塾・だるま」の活動により、災害の影響の少ない社会が実現することを願っています。地道な活動は、必ず功を奏するものです。